

24 夏休み経済教室(東京中学対象) 記録

1 日時：2024年8月19日(月曜日) 9時30分～16時00分

2 場所：慶応義塾大学北館大ホール

3 参加人数：会場131名、オンライン158名(申し込み数)

会場125名、オンライン99名(当日、関係者を含む実数)

4 主な内容：進行役 小谷勇人先生(春日部市立武里中)

(1) 主催者挨拶 経済教育ネットワーク代表 篠原総一先生(同志社大学名誉教授)、共催者、鈴木深氏(東京証券取引所)より挨拶があった。

(2) 1コマ目 テーマ「JPXの最新の動きと金融経済教育の取組み」

鈴木深氏(東証金融リテラシーサポート部課長)より、以下の報告があった。

- ・オンラインによるJPX見学施設(東京証券取引所および大阪取引所)の紹介があった。
- ・JPXについて、証券取引所の役割、JPXのビジネスモデル、会社の概要の説明がされた。
- ・JPXの最新の動きについて、現物市場の機能強化に向けた取組み(取引時間の延伸)、市場区分見直し後のフォローアップを行なっていること紹介がされた。
- ・金融経済教育の取組みについて、これまで証券普及知識プロジェクトとして日本証券業協会及び東京証券取引所等にて提供されてきたミスターX、金融クエストなどの教材は、2024年8月、新たに設立された金融経済教育推進機構より提供されることになった。
- ・大学入試おける出題問題を紹介しながら、個人の金融資産の保有状況(米、欧、日)、投資部門別株式保有比率の推移、2023年度の株価や個人株主数の推移、海外取引所とのデータ比較についての説明がされた。
- ・最近の株式市場の動きについて、東京市場の株価と売買代金と業種別年間騰落率をもとに説明がされた。
- ・「18歳からはじめるNISA」の教材の紹介があり、簡単なデモンストレーションを行なった。また、新教材について、山本雅康先生(奈良学園中学高等学校)から授業実践の報告があった。

(3) 2コマ目 テーマ「経済の視点から地理の授業を創る」

中西覚先生(埼玉県鳩山町立鳩山中学校)から、以下の提案があった。

・生徒がよりよい社会にしていこうと行動を起こすことに繋げるには、授業の中で主に合理的判断を磨いていくことが必要ではないか。

そのために事実的知識、説明的知識、価値的知識が必要となる。これらの知識を習得させるには、問いの立て方が重要である。日々の授業では「なぜそうなっているのか」と思わせる、解けそうで解けない学力差のない問いを大切にしている。また、問いを分解してあげることが必要で、その際に経済な視点があると地理的事象の理解がしやすいと考えた。経済の視点についてはマンキューの理論をもとにした梶谷氏の理論を参考にした。

・実践事例では、中1世界の諸地域(オセアニア州)を取り上げ、MQに「なぜオーストラリアに羊が多いのか」とし、経済の視点(インセンティブ、コストなど)を取り入れたSQを設定した単元を紹介した。

・活動終えた生徒の感想を取り上げ、果たしてその考えが妥当なものか経済的視点(コスト)から考察。妥当

ではないが、「時間距離」「経済距離」をつかむよい気づきになった。また、事実に知識の定着にもつながった。

- ・経済の視点からの問い（単発の問い、単元を貫く問い）の例を紹介。①MQ のブレイクダウンや興味関心をひきつけるネタとして、「インドで牛肉は生産されているだろうか？売れるだろうか？」②単元を貫く問いと関連させて、「アフリカの国々の発展の難しさはどこにあるのか」
- ・最後に、経済的視点を取り入れた授業を実践したことで、暗記重視の静態地誌から逃れられることや、概念を活用した多面的・多角的な考察・構想・探究という高校への接続がスムーズになると考えを述べ、発表を閉じた。

（別添の中西先生の報告資料参照）

中西先生のご発表に対し、三橋浩志先生（文部科学省 初等中等教育局）から、以下のようなコメントがあった。

- ・中学校の地理学習は地誌学習であるため、地域の理解を深めるために経済の視点は有効であるが、経済地理的事象の理解にはならないように注意したい。中学校地理学習は、地域の理解を深めることが目的である。経済の視点をを用いることで地域的特色の理解を「助ける」「深める」ことにつなげる実践が重要。
- ・経済地理学のモデルには現実の地域の特色が多様であるため実態の経済現象と乖離することも多い。結果的に伝統的な教材が多くなる。例えば、教科書に「四大工業地帯と言われている」と記載があるが、「北九州工業地帯」の生産額は全国 10 位である。基本的事項として教えるだけでなく、社会や経済の流れにアンテナを貼ってほしい。
- ・「チューリップの日本一は富山県」と言われているが、球根の生産量一位が富山県であり、切り花の生産額一位は新潟県である。新潟県の記述がないのはどうして？ 経済の変化について、どのように子どもたちに教材として教えながら地域を理解させるか考えてほしい。
- ・発達段階に応じて、経済現象の学習、地域の学習を行っていききたい。同じコンテンツでも深みが変わる。「詳しく学ぶ」「既習を踏まえる」だけでなく、社会科ではどのように学習を深めていくのが必要。
- ・「地名物産の暗記」を乗り越えなければならない。暗記型になった背景として、戦前の皇国地誌の反省から静態地誌に変わってきた。大事なことは社会を認識できること、つまり経済を踏まえた地理学習を行なっていくこと。
- ・近年では「前提をゼロベースで社会を考える」ことが広がっている。社会的に不利になっていることをどう考えていくか、「地域の格差」「地域の分断」を是正するために経済的な概念を使い、教育につなげていくことが必要。

（別添の三橋先生の報告資料参照）

報告に対する以下の質疑があった。

Q：地理の授業で活かされた力を生徒が中 3 の段階でどの程度、認識できていればよいと考えているか。

⇒中 2 の地域調査や中 3 の地域のあり方の学習に経済の視点が生かすことができれば良いと考えている。例えば、「少子高齢化が進んでいる町をより良くしていくには？」といった学習で「駅を作れば良い」と生徒から意見がよく挙がるが、経済の視点を入れることで今あるものを活用する、希少性、コストについて考えることができると考えている、との回答があった。

Q：オセアニア州の MQ は誰が設定したのか？

⇒なるべく子供と一緒に考えていきたい。なかなか毎時間できないこともあるが、Forms を使い、生徒から挙げた意見から課題を作成している、との回答があった。

(4) 3 コマ目 テーマ「経済の視点で歴史の授業を創る」

まず、授業提案の今村吾朗先生（東京都練馬区立石神井西中学校）から、以下のような報告があった。

- ・歴史学習と経済学習を足すような授業は難解になるため、歴史の学習に経済の視点を盛り込んだ。歴史の授業に行動経済学の視点をもちこんで歴史的事象を多面的・多角的な考察をできるようにした。
- ・意思決定場面において、行動経済学の視点から考察を深めることで認知バイアスに気付き、よりよい意思決定につなげることを狙いとした。
- ・学習課題を設定させるだけでなく、生徒が自分で仮説を立て、仮説を追究しながら学習課題の解決に向かう単元構成になるように工夫した。
- ・実践は、第一次世界大戦から学習し、太平洋戦争の決断がされた背景を追究する流れ。単元の途中（第9時）で行動経済学の授業を実施。行動経済学の視点からこれまでの学習を振り返られた。
- ・長い単元構成であるため、振り返りや自分で学ぶ時間を大切にしていた。生徒の反応を見ながら、授業構成を変えた。振り返りではできるだけ毎回チェックをして次の授業で紹介した。
- ・生徒のレポートの記述から、行動経済学の視点を生かした意思決定に関する記述がみられた。
- ・課題として行動経済学との関連付けが曖昧になっていたものがあり、絞った方が関連づけできたのではと考えた。
- ・歴史学習を経済の長期トレンドと重ねることで、歴史を大観させられないか、また、歴史学習の構想ともつなげ課題意識をもたせて、公民につなげていきたい、と述べ発表を閉じた。

（別添の今村先生の発表資料参照）

今村先生の発表に対し、関谷文宏先生（筑波大学附属中学校）から以下のコメントがあった。

- ・歴史は時代の流れがあるため、見方や立場、考え方が変わりうる。日本は人口減少となるため、今までこうだったからこうなるという見方は難しい。将来はこうなるかもしれないという予想を立てる力、さらにどう対処するかが求められる。
- ・例えば「アンカリング」を取り上げ、資料を提示し洗濯するときに自分に認知バイアスがかかっていないかチェックする方法があるのではないか。
- ・経済産業省が出している『未来人材ビジョン』（令和4年5月）に示された2050年に求められる能力は「問題解決能力」、「的確な予想」、「革新性」であるとされているが、戦時や変革期には常に求められている能力でもある。
- ・学校の授業では感情より理性を重視するが、認知バイアスの視点から考えると人間の行動は感情面で意思決定する機会は多い。
- ・歴史の場合は、答えがありそうだけど、はっきりと正解は断定できない。
- ・近年 Well-being が唱えられているが、学習を促進させるポジティブ感情が必要となる。小学校では自分で考えたことを積極的に発言する文化があり、中学校でもそのような自己肯定感を大切に発言させたい。しかし、そのままではなく、自分で発言内容を吟味する、自分で気づけるようにならなくてはならない。
- ・政治と経済を一緒に勉強しているのが歴史なのではないか。

（別添の関谷先生の報告資料参照）

報告に対して関谷先生及び会場から以下の質疑があった。

Q：行動経済学の内容に関わる授業はどれくらい詳しく指導したのか？

⇒第9時の行動経済学の1時間のみで行なった。用語の難しさを克服できたのは、説明よりクイズを先に行なったから理解できたのではないかと、との回答があった。

Q：他の単元でも実践できるのだろうか成果と課題で発表されていたが、現在どのような構想しているのか？

⇒他の実践だと、 sunk cost、リスキーシフトは生徒にとってわかりやすいため、現代の歴史でも取り入れることができそうだと考えている、との回答があった。

Q：経済の視点と他の視点とのバランスはどのようにしていたのか？

⇒行動経済学の視点を強調しすぎると生徒から「覚えるのか、テストに出るのか」と意見が出てしまうため、レポートや振り返りを書く際、考察する際の視点とする。学習内容の基本は教科書ベースとしている、との回答があった。

Q：仮説を立てて、追究する単元計画の中で工夫をしていたことは？

⇒子どもから出た仮説に対して教師が「そうだね」と言わず、「なんでそう思うの？」と聞き、生徒と一緒に考えるようにしている。なんでもありだと歴史教育ではなくなってしまう、との回答があった。

Q：開戦の意思決定の主体を誰としていたのか？どこに焦点をあてていたのか？

⇒人物に焦点を当てると人物批判に終始してしまうため、政府に焦点を当てた。社会科という視点から考えれば、国民を決定権者とする考え方もある。当時の国民はどう考えていたのか。国民をそうさせたのは何か。そこまで吟味できる視点をもてる生徒を育てることも必要でないか、との回答があった。

Q：単元の問いに対して、生徒のレポートに「民主主義の特徴と関連～」と書いていたので、間違えた認識となっていないのか。

⇒歴史の答え合わせにならないようにすること、正しい認識をもたせることは大事。ご指摘の通り妥当性のある記述が書けるように指導していくことが今後の課題である、との回答があった。

(5) 4コマ目 テーマ「見方・考え方を育てる公民の指導（財政）」

藤田琢治先生（東京都目黒区立第九中学校）から、以下の報告があった。

- ・都中学校社会教育科研究会では一貫して、「社会の担い手」「社会の形成者」としての力を育成することを大切にしてきた。本実践は学習指導要領の具現化、かつグローバル化する社会を生き抜く資質、能力の育成を目指した授業を計画、検証した R5 年度の研究成果の発表である。
- ・財政の学習をパネルディスカッション形式で行う計画とした。着目させる見方・考え方は「受益と負担（希少性）」である。
- ・パネルディスカッションのテーマ「よりよい未来のために、より安心できる財政を考えよう」。
- ・各班の立場を①環境保全／景気の調整、②所得の再分配、③社会資本の整備、④社会保障の充実／所得の再分配、⑤資源の分配、⑥景気の調整に焦点化した立場に設定。より生徒が「自分事」として取り組めるようにした。
- ・生徒がこれまでどれくらい活動型授業を体験してきたか主張づくりが左右されるため、個人→班で主張づくりを行なった。
- ・パネルディスカッションを活発にさせるため、他の班の主張や反論も想定させた。また、議論を活性化させるため

に、必ず複数の班に質問や反論をさせるようにした。

- ・生徒が見方・考え方を働かせた記述があった要因としては、パネルディスカッションの「立場」を財政について包括的に学習できるように工夫したことがある。また、調査や発表の活動を行った（主体的に活動した）ことも内容を確実に習得させることにつながっているのではないかと考えた。
- ・パネルディスカッションの立場やワークシートの問いが生徒の習得、考察、構想につながるものであったが、今後にも更に検討する必要があると課題を提示し、発表を閉じた。

藤田先生の発表に対し、三枝利多先生（学芸大附属竹早中）から以下のようなコメントがあった。

- ・この実践の特徴は、①生徒の主体的学びを取り入れた活動型の授業、②見方・考え方を育成する授業、③生徒の成長が実感できる授業。・社会科における活動型授業の意義として活動型授業が目標にせまることができることができる。実践事例として、歴史的分野でのパネルディスカッション、地理的分野での屋台村発表、公民的分野でのワークショップなどを紹介。いずれも、資質、能力の育成に繋がっていた。
- ・活動型授業を有効なものとするための要素として、①教師に必要な見通し、②最初から教え込まない我慢と工夫、③生徒の変容に気づく、④振り返りの授業を大切にする、⑤外部講師を授業に取り入れる、⑥授業をパッケージで考える。⑦日常のグループ活動を活用することを挙げられた。
- ・見方・考え方を育成する授業として、①積み上げる大切さ、②パッケージの必要性（活動型授業は毎時間ではなく、単元の中での中核として取り上げる）を挙げられた。
- ・中学生が財政の仕組みや制度を考えるために、経済の見方・考え方を実感的に理解させることが必要。
- ・社会の仕組みは政治と経済は別々ではない。経済学を理解させるのではなく、経済の見方・考え方を実感的に理解させるために、経済と政治を融合させた授業計画が有効になるのではないかと。学ぶ順序性を検討することも一つであると説明された。

質疑応答は事前のチャットからの質問として、

Q：これから経済分野を学んでいくという最初の授業において、「経済を学ぶ」ことの動機付けとして、反応が良かったものや、効果的な実践があれば教えていただけますと幸いです。

⇒経済の導入の授業としては、「無人島漂着シミュレーション」という授業が有効である。現代人が無人島に漂着したという場面設定で、生きるためには、水や食料、衣服、住居などを自給自足の生活で手に入れる他はないことから、経済とは生活のための手段に他ならないことに気付かせ、次に場面設定を変えて、島の反対側に十人程度の漂着民らしき人を発見したところ、木登りが上手で果実を採るのが上手い者、魚を捕るのが上手い者、狩りが上手い者などが居て、分業が行われていること、さらには島の反対側の人たちと筏をつくって脱出を図ったが、文明社会には戻れずに付近の島にたどり着き、その島は1000人規模の住民が居て、小舟を使った漁業が行われ、元の島で採れたバナナが採れないかわりに、マンゴーが採れるという場面設定から、豊かな生活を求める過程で、分業と交換の重要性に気付かせることができる、との回答があった。

（別添資料添付なし）

（6）新井先生（経済教育ネットワーク理事）からまとめと最後の挨拶があった。

今日の中で印象的だったのは、「授業が面白かった。生徒と一緒にやって面白かった」という授業者の感想だった。それが一番ではないか。教員が面白くなければ、良い授業はつくりえない。今日の経済的な観点での授業

はチャレンジング内容でその後の議論もエキサイティングであった。自信をもって、自分の思いを生徒にぶつけてほしいと語り、挨拶を終えた。

以上、記録：三部達也（福島県矢祭町立矢祭中学校教諭）